

中学生・高校生の交際及びそれに伴う 恋愛行動とその背景要因との関連

—埼玉県における調査をもとに—

丸 井 淑 美* 橋 本 紀 子*

A Related Study on the Back-ground Factors of Affectionate Behavior and Sexual Relationship —Among Junior High and High School Students in Saitama Prefecture—

Yoshimi MARUI* and Noriko HASHIMOTO*

An affectionate behavior study of junior high and high school students was carried out using an anonymous, self-administered questionnaire in order to find out the following:

- (1) The circumstances of their environment, the way in which students interact with each other, their psychology, and affectionate behavior. An analysis of the factors which affected the way in which students interact with each other and of their affectionate behavior was then conducted.
- (2) The progress of the research regarding these four factors from 2002 to 2010 among junior high school students is also reported.

By analyzing the results of the X^2 test, the Shapiro-Wilk test, the Mann-Whitney test and through logistic regression analysis, I have come to following conclusions.

More than a quarter of junior high school students and more than half of high school students have a boyfriend or a girlfriend. Of the high school students in a relationship, 40.6% of the girls and 27.2% of the boys have experienced sexual intercourse. The rate of cell phone use in junior high schools increased from 27.9% to 48.3% in the eight years of the study period, and there has been an increase in the rate of boys confessing to girls.

Using logistic regression analysis, junior high school students displayed affectionate behavior such as 'cell phone', 'missing somebody' and 'the desire to act out.' However, in the eight-year period of the study this behavior changed to 'love towards their father' and 'friends of the opposite sex you often talk to at school.' Again using logistic regression analysis, high school students are affected by 'having friends of the same and opposite sex at school' and 'finding out information about sex through magazines and comics.'

According to my research, information learned about sex through magazines and comics is very influential in the way in which students interact with each other and in their affectionate behavior. Their evaluation of this information impacts both their behavior and their acceptance of subsequent information they receive about sex. They need to be educated about decisions they need to make, how to prevent the spread of sexual diseases, and pregnancy during their

* 教育学研究室, 女子栄養大学: Laboratory of Education, Kagawa Nutrition University

developmental period. Their social circle is usually made up of their friends, so they need the opportunity to get advice from an independent source, such as an official adolescence clinic, a website, or a counselor to help them with any questions or problems they may have.

I. 序 論

思春期の子どもたちにとって恋愛は、関心の高い事柄のひとつであり、彼らが特定の人との交際や恋愛をどのように捉えているかを理解することは性教育に携わる者にとって重要なことである。

中学生・高校生は、二次性徴の発現にともなう不安や悩み、戸惑いを感じている反面、性についての興味・関心をいだいており、特定の人と交際をする生徒も少なくない。しかし、その交際は多様であって、生活や発達に与える影響についても両性間の好ましい関係が物事に対する積極的な意欲をわかせることもあるが、その反面、情緒的に不安定となり、学校生活や学習に不適応を生じたりすることもある¹⁾。また、身体的・生理的な知識や異性に対する理解の不足、性的な自己の確立が不十分なために、安易に性行動を体験し、心身ともに傷ついたり、望まない妊娠をする者や性感染症に感染する者もいる。

青少年の性に関する問題は、正しい知識を理解したからといって望ましい行動がとれるとは限らないところにある。それは性の問題の多くが、他の保健行動と異なり、相手との関係性において自らの意思決定や行動選択を行うところに特徴があるからである。性行動が活発になる思春期後期の青少年に対しての性教育が十分な効果をあげているとはいえない現在、その前段階にある中学生及び具体的な性行動を始める高校生には、より日常生活に密着し、発達に応じた性教育の取り組みが必要である。そのためにも中学生・高校生を取り巻く環境や行動様式を正しく理解することが親や教師にとって必要不可欠である。

思春期の性行動における研究をみると、取り上げられた要因、調査対象、調査地域に相違はあるものの、若者の性行動の発達や性意識、交際、恋愛について多くの報告がみられる。

財団法人日本性教育協会は、1974年からこれまでほぼ6年おきに6回にわたって、「青少年の性行動全国調査」をしてきた。この調査では、青少年の性経験が性的な関心、デート、キス、性交の順に生じることや、性交経験率が近年高まっていることを明らかにしている²⁾。

東京都生活文化局の調査³⁾では、東京都に在住する中学生・高校生の異性交際について分析している。その結果によると都内の高校生のうち、「特に親しく交際している異性がいる」のは男子28%、女子33%で、彼らの交際は多岐にわたっていた。

東京都幼稚園・小・中・高・心障教育研究会の調査⁴⁾では、中学生の特定異性との交際について、中3では男子80%、女子85%が「異性と親しくしたい」と思うと

している。

堀ら⁵⁾は、高校生の性行動を規定する要因として、友人・家庭・学校・マスコミをあげている。また、久保田⁶⁾は、新潟県の高校生を対象にした調査で、物的側面として、携帯電話・PHSの所有と性交経験に関連があることを示している。

松井⁷⁾は、大学生の恋愛行動はいくつかの側面に分かれるが、大きく五段階を経てほぼ1次元的に進行することを示した。

木原は2001年の調査⁸⁾で、保護者・教師・生徒の意識調査を行っており、性に関して大人と若者の間には大きな意識・認識のギャップが存在することを明らかにしている。また、木原は2002年の調査⁹⁾で、地方の高校生の日常生活・性意識・性行動に関する調査を実施し、地方高校生と都会との比較を行ったが、その結果は、ほとんど変わらなかった。

NHKの「日本人の性」プロジェクトは¹⁰⁾、1999年に全国16～69歳の国民3,600人を対象に調査を行った。その結果、10代の性交初体験の年齢は、男性で17歳、女性で16歳が最も高率となったことを明らかにしている。このことから、特定の人との交際が活発になり始めるのが高校生の年齢であるとする、その前段階にある中学生にとって、交際や恋愛は対人関係の基礎を築く重要な時期であるといえる。一方で、中学生・高校生の交際には、家庭・友人・学校といった環境や青年に特有の心理が関与していることが予想される。

先行研究においては、デート・キス・性交経験率や、日常生活との関連が示されているが、さらに中学生・高校生を取り巻く生活や心理と交際や恋愛行動とのかわりを検討する必要があると考えられる。しかし、近年中学生を対象とした性行動に関する調査は、高校生のそれと比べると特に少なく、代表的なものとして財団法人日本性教育協会「青少年の性行動全国調査」及び木原らによる「HIV感染症の動向と予防モデルの開発・普及に関する社会疫学調査班による調査研究」がある。そこで、本研究では、中学生・高校生の発達段階に着目し、中学生・高校生の性的経験の有無や特性、進行状況等を取り上げた財団法人日本性教育協会「青少年の性行動全国調査」の調査を参考にして調査を行った。筆者が2002年に実施した中学生対象の調査結果と、2010年に実施した中学生・高校生対象の調査結果をもとに、中学生・高校生の交際経験の有無とそれに伴う恋愛行動に焦点をあて、中学生・高校生の交際及び恋愛行動に影響を与えている背景要因として「環境的要因」と「心理的要因」をとりあげ、それらの関連について検討するとともに、中学生における経年変化を分析する。

1. 研究目的と概念規定

1) 研究目的

- (1) 2010年の調査から、中学生・高校生を取り巻く環境、心理と交際及び恋愛行動との関連を明らかにするとともに、交際及び恋愛行動に影響を与える要因を分析する。
- (2) 2002年及び2010年の調査から、中学生を取り巻く環境、心理と交際及び恋愛行動の経年変化を明らかにする。

2) 概念規定

本研究における用語の概念規定は以下のとおりである。先行研究には異性愛を基盤とした性行動、交際、恋愛行動に関する研究が多く、異性愛、同性愛、両性愛を含めた性行動等に関する研究はほとんど見当たらなかった。そこで、本研究では、異性愛に関する研究の中から各用語の概念を参考にした。

(1) 性行動

ダイヤモンド¹¹⁾は、性行動にはほとんどの人が好奇心を抱いているので、性行動についてはよくわかっていると考えがちだが、事実は全くそうではないと述べている。その一つの理由は、自分の経験から一般論を引き出し、他人の行動もわかったようなつもりになってしまうことである。もう一つの理由は、自分の行動について、実際に行動している内容と、他人に話している内容との間に隔たりがあるということである。また、性行動の研究は、比較的その歴史が浅く、一般の人ばかりでなく、科学者の間からも、しばしば抵抗を生じるということもあったとしている。

石濱ら¹²⁾は、性行動とは、種族保存に寄与する情動行動の一つであるとしている。人間の性行動には、生殖行動と情動行動としての二面があり、人間の性行動とは、性交の前後に行われる全ての行動が含まれるとしている。

KirkendallとLibby¹³⁾は、性行動は信頼、廉直、完全性、感受性、責任感などが存在するかどうか、あるいは慰みや搾取などが存在するかどうかという対人関係の文脈の中で概念化されなければならない。性的関係は、ペニスが膣に挿入されるかどうかということを超えねばならない。すなわち、性表現に対する全体的観点の一部として理解されうるとしている。

また、福富^{14, 15)}は、「性」の意味について、「生物学的な性別」「心理的な性別」「行為としての性」に分けて考えた。「行為としての性」については次のように述べている。これは男女が行う様々な性行動を指す。一つは、生殖としての性行動であり「生理的な性欲求」に基づく性行動、もう一方は必ずしも生殖を目的としない性行動であり、お互いの人間関係を求める行為である「愛情的な性欲求」に基づいた性行動である。避妊を前提とした性行動は、生殖と切り離された行為で

あり、性を媒介にした人間関係を支える行動で、性的な関わり行為ともいえる。

東京都生活文化局の調査では、性行動について多くの性的行動の中から、マスターベーション、キス、ペッティング、性交の4つの行動経験に限定して検討している。

佐藤ら¹⁶⁾は、高校生の性行動について調査し、異性との交際、性経験、避妊、異性関係の許容範囲、避妊に気を使うべき性について検討した。その結果、1対1で付き合っている異性との関係では、女子の性交経験率が男子を上回ったとしている。

そこで今回は、福富の「行為としての性」を性行動として上位概念におき、下位概念として、男女が行う様々な性行動の交際、恋愛行動、性経験を設定した。

(2) 交際

先行研究では、交際に関連する性意識や性行動の現状についての研究は数多くみられるものの、交際そのものについての研究は少なかった。

東京都生活文化局の調査では、異性交際を人間関係に重点をおいた立場から、高校生の異性交際の現状、異性交際に対してどんな悩みを感じているか、また、高校生としてどの程度の異性交際までが許されるかなどを中心に異性交際の実態を把握している。表現としては、「特に親しくしている異性」「異性交際」等を使用している。

戸田¹⁷⁾らは、青年期における愛着(attachment)の構造を探り、交際との関連を明らかにした。愛着と交際における意識や行動とのあり方について検討した結果、そこには性差がみられた。男性では交際と、愛着との間に何の関連もみられなかったが、女性では強い関連がみられたとしている。

竹村^{18, 19)}は、対人魅力研究において、異性のどのような特徴に着目してデートや交際の相手を選択するかを検討している。その結果、女子は男子より、予期される相互作用期間が長いほど、異性選択過程において身体的特徴よりも人格的特徴についての情報処理が促進されるとしている。

また、異性愛に関して、Rogersは心理的性の発達には4つの段階があるとしている。第一は自分自身の身体を通じて快感を感じる自己的段階であり幼児期の特徴である。第二は異性の親を同一視の対象とする段階である。フロイトのいうエディプス・コンプレックスが形成される時期でもある。第三は両親への依存から離れて同性の仲間集団との関係を重視する段階である。最後の段階は異性愛を感じるようになる時期である。これは思春期に始まり、生涯を通じて続くものと思われる。社会生活の基盤が夫婦を中心とした家庭にある現代社会では、青年期における異性関係のありようが重要な意味を持っているといえよう。

岡田ら²⁰⁾は、横浜市の中学生・高校生を対象とした調査で、男女交際・性意識・性行動との関連を調査

しており、1対1の男女交際の経験率は、高校生女子で30%を超えることを明らかにした。その中で、高校生は「ボーイフレンド（ガールフレンド）」「恋人」という言い方はほとんどしない。1対1で付き合っている相手は「カレシ」「カノジョ」と表現するとしている。

そこで本研究では、交際について「彼氏・彼女と呼べる人」「彼氏・彼女とのつきあい」という表現を用いた。

(3) 恋愛行動

恋愛とは一般に男女が互いに恋い慕うこと、またその感情のことを指す²¹⁾。現在、日本における恋愛の研究は、青年心理学、社会心理学、家族社会学の3分野に大別される。

松井ら²²⁻²⁴⁾は、中学生の恋愛意識について、教師と生徒の両者を対象に調査を行った。教師は、中学生の恋愛を「恋愛」ではなく、異性との交際、つまり「異性交際」として認識していた。また、中学生にとっての恋愛は、成人恋愛のように性交と結びついたものではなく、別個のものとして認識されていたとしている。

また、松井は、青年の恋愛行動に注目し、大学生の恋愛行動の進行を構造化した。青年の恋愛行動は、友愛的な会話から始まり、プレゼントを交換する第一段階から、デートをし、用もないのに電話をしたり、会ったりする第二段階、キスをし、相手をボーイフレンド・ガールフレンドとして友人に紹介する第三段階、友人に恋人として紹介する第四段階を経て、結婚が具体化してゆく第五段階に至る。

今回は松井の開発した「恋愛行動の進行」（五段階²⁵⁾を参考に、中学生用に一部修正した12項目を使用し、調査・解析を実施した。

II. 対象及び調査方法

1) 対象

埼玉県西部地域の公立中学校及び公立高等学校に通う生徒を対象に、自記式質問紙調査（集合法）を実施した。実施に当たっては、まず筆者が学校長へ調査を依頼し、次に生徒の保護者に対して、回答者である生徒の人権的配慮及び調査実施に関する説明を行ったうえで、調査協力の得られた学校に調査票を配付し、各学校にて調査を実施した。その結果、中学校は埼玉県西部地域に位置する同一市内の4校、高等学校は西部地域に位置する共学校普通科3校の協力が得られた。

中学生を対象とした調査は、2002年及び2010年に二回行った。両年ともに同一市内の公立中学校で調査を行った。

2010年の回収数は、中学生265名、高校生592名の計857名（回収率100%）で、このうち846名（98.7%）を分析対象とした。2002年の回収数は、調査協力の得られた中学校3校の中学生771名（回収率100%）であった

が、このうち2010年に調査した中学生の回収数とほぼ同数にするため、無作為抽出して269名（36.0%）を分析対象とした。

2) 対象地域選択理由

埼玉県西部地域は、武蔵野台地の一端に位置し、昭和40年代以降、工業団地の完成や民間の住宅開発により人口が急激に増加し、都市化が進行、首都圏近郊の住宅・工業都市として発展している。

質問紙の内容から公立学校には拒否される懸念もあったが、当地域は筆者の勤務地区であったことから、性教育の現状を把握しやすいと考えた。

さらに先行研究²⁶⁾より、若年者ほど都市（政令指定都市）と地方（その他の市町村）の地域差が少ないとの報告もあり、当地域を選択することは特に問題ないと考えた。

3) 方法

自記式質問紙 集合法（実施場所は教室）で行った。倫理的配慮として、質問紙に調査に協力しなくても学業成績や学校成績には全く関係ないことを明記し、口頭でも説明した。回答は無記名にて行い、プライバシー保護のため本人が解答用紙を封筒に入れて密封し、クラスごとに回収した。また、本研究は女子栄養大学倫理委員会で承認を受けている（承認番号 71）。

4) 期間

2002年6月～7月（中学生対象）と2010年1月～3月（中学生・高校生対象）に行った。

5) 調査内容と尺度

(1) 基本的属性

性別、学年を取り上げた。

(2) 環境的要因

① 学校環境

学校環境の項目は、授業理解度、部活動の所属、部活動の楽しさ、相談できる先生の有無を設定した。

② 友人環境

友人環境の項目は、同性・異性の友人の有無、友人との同調、友人への非干渉、友人に対する自己開示を設定した。（以下、友人同調、友人非干渉、友人自己開示とする。）

友人同調では、中学生の友人との同調傾向を測定するための尺度として、福富らにより開発された友人同調尺度²⁷⁾を採用した。

友人非干渉では、中学生の友人への非干渉傾向を測定するための尺度として、福富らにより開発された友人非干渉尺度²⁸⁾を採用した。

友人自己開示では、中学生の友人への自己開示の程度を測定するための尺度として、福富らにより開発された友人自己開示尺度²⁹⁾を採用した。

③ 家庭環境

家庭環境の項目は、同居家族の有無、父・母・親に対する感じ方、家庭における性の話題の有無を設定した。

父・母・親に対する感じ方では、中学生の親への愛情を測定するための尺度として、福富らにより開発された親への愛情尺度³⁰⁾を採用した。本尺度の項目は、父親に対する感じ方、母親に対する感じ方、親（両親）に対する感じ方の13項目から構成されている。中学生の生活環境の中で家庭は重要な場となっている。特に、親子関係は、中学生の意識や行動に対して多大な影響を及ぼしていると考えられる。「性」に関わる要因の一つとして、家庭環境、特に親との関係が上げられることも多い。本研究においても、愛情のない家庭、存在感のない親などを関連要因と考え、その他、親への感じ方と合わせて検討したい。

④ 情報環境

情報環境の項目は、携帯電話・PHS、自分専用の電話、パソコン、テレビ、DVD・ビデオ、ゲーム機、自分の部屋といった、通信機器等所有の有無を設定した。

(3) 心理的要因

① 性に対する興味・関心

性に対する興味・関心の項目は、性について知りたい内容を設定した。

② 自己認識欲求

中学生が、普段の生活の中でどの程度自分を知りたいと感じているのかを測定するための尺度として、上瀬³¹⁾により開発された自己認識欲求尺度を採用した。

③ ぬくもり希求

青少年心理研究では、進んだ異性交際を行う若者の心理背景に、人とのぬくもりを求める気持ちがあることが指摘されている。

本研究では、中学生のぬくもり希求を測定するための尺度として、福富らにより開発されたぬくもり希求尺度³²⁾を採用した。

④ 非行規範意識

問題行動念慮では、先行研究より家出念慮、退学念慮、自殺念慮、対教師暴力念慮、薬物使用念慮の5項目^{33, 34)}を設定した。

非行規範では、中学生の非行規範を測定するための尺度として、内山ら³⁵⁾により開発された非行規範尺度を採用した。本研究では、尺度を中学生・高校生用の一部修正し、非行規範意識の測定を行った。

(4) 行動的要因

① 交際の実態

交際の実態の項目は、交際の有無、交際開始時の自分と相手の年齢、恋愛行動経験の有無、交際開始のイニシアティブ、交際相手の人数、交際希望の有無、交際に対する抵抗感を設定した。

恋愛行動経験の有無では、中学生の恋愛行動経験を測定するために、松井により開発された恋愛行動の5

表1 恋愛行動に関する因子分析

	(第一因子) 親密期	(第二因子) 好意的会話期
Q17(3)-9 キスをする	.942	-.168
Q17(3)-5 二人だけでデートする	.629	.108
Q17(3)-12 セックス(性交)をする	.616	.039
Q17(3)-6 手をつなぐ、うでをくむ	.583	.120
Q17(3)-8 おたがいの家に遊びに行く	.570	.083
Q17(3)-11 親に紹介する	.457	.253
Q17(3)-1 相手に相談ごとをする	-.091	.644
Q17(3)-10 友だちに彼氏・彼女として紹介する	.119	.570
Q17(3)-4 用もないのに電話やメールをする	.140	.421
Q17(3)-2 登校・下校を一緒にする	.059	.410
寄与率	37.66%	3.97%

注) 主因子法, プロマックス回転

段階を採用した。本研究では、尺度を中学生用の一部修正し、恋愛行動経験の測定を行った。

また、恋愛行動経験を以下のように評定した。まず、恋愛行動経験の12項目について因子分析（主因子法）を行った。次に、因子負荷量の低い2項目を外して再度因子分析を行った結果、第一因子「親密期」、第二因子「好意的会話期」の2因子が抽出された（表1）。なお、この質問項目における信頼性係数 α は0.848であり、内的整合性が認められた。具体的には、各項目に対する個人の回答を単純加算し各因子の得点とした。さらに二つの因子の得点を単純加算して恋愛行動得点とした。

交際開始のイニシアティブでは、「自分から」「相手から」「どちらともなく」の3件法を用いた。交際に対する抵抗感では、「本人同士がよければかまわない」「少し抵抗がある」「絶対によくない」の3件法とした。

② 性行動の実態

性行動の実態の項目は、性風俗・性情報への接触の有無、性交に対する意識を設定した。性交に対する意識では、「結婚するまで性交するべきではない」「婚約者同士なら性交してもよい」「愛があれば性交してもよい」「愛がなくても性交してもよい」の4件法とした。

6) 要因分析の手法

統計ソフトPASW ver.18を用いて、 χ^2 検定、Shapiro-Wilk検定、Mann-Whitney検定、ロジスティック回帰分析を行った。

本研究で使用した各尺度については、単純加算したものを尺度得点とし、その平均得点を境に低得点群と高得点群の2群に分けた。

異性交際・恋愛行動に影響を及ぼす要因分析には、ロジスティック回帰分析を行った。交際経験の有無・恋愛行動経験を従属変数に、研究枠組みに示した関連要因を独立変数として用いた。ロジスティック回帰分析は、比較的多くの独立変数を同時に用いることができ、その意味の理解も容易にできる利点をもつため、この方法を用いた。発達段階を踏まえ、中学生と高校生はそれぞれ個別に分析を行った。

III. 結 果

1. 中学生・高校生における各要因の実態 (2010年調査)

1) 環境的要因

(1) 学校環境について

授業理解では、中学生では80%以上、高校生では75%以上の生徒が授業をおおむね理解していた。相談できる先生の有無では、「いる」と答えた生徒が中学生では39.5%、高校生では32.8%であり、教師生徒間の関係の希薄さがうかがえる結果となった。

(2) 友人環境について

友人では、中学生・高校生ともに約95%が同性の友人を、約50%が異性の友人を有している。また、中学生・高校生ともに約80%が何でも話せる同性の友人(親友)を有している。

中学生・高校生ともに、女子の方が男子より異性のこ

とや自分の悩み、将来のことについて友人に話す自己開示傾向が強いことが明らかになった。

(3) 家庭環境について

父・母・両親への愛情は、中学生より高校生の方が男女とも低くなる傾向がみられた。また、「私は親から十分愛されていると思う」中学生54.4%、高校生50.4%、「将来、両親のような家庭を築きたい」中学生29.9%、高校生20.6%となり、今の家庭に十分満足しているとは言いがたい結果となった。

「親と性に関する内容の話をしたことがあるか」は、中学生男子13.4%、中学生女子47.7%、高校生男子19.8%、高校生女子50.3%が、あると回答した。親と話した内容は、中学生男子は「セックス(性交)」33.3%「二次性徴(発毛・声変わり・乳房のふくらみ)」27.8%、中学生女子は「初経(月経・生理)」91.8%、「二次性徴(発毛・声変わり・乳房のふくらみ)」35.6%が上位となった。また、高校生男子では、「セックス(性交)」43.6%、「避妊」40.0%、高校生女子では、「初経(月経・生理)」84.5%、「異性との交際の仕方」37.8%が上位となった。

(4) 情報環境について

携帯電話・PHS所有率は、中学生男子44.4%、女子51.9%、高校生男子93.9%、女子96.0%であった。また自分専有テレビの所有率は、中学生男子28.1%、女子14.7%、高校生男子40.3%、女子31.4%であった。

2) 心理的環境

(1) 性に対する興味・関心について

性について知りたい内容は、中学生男子では「エイズ」の17.3%が最も高率となった(図1)。次に「異性との

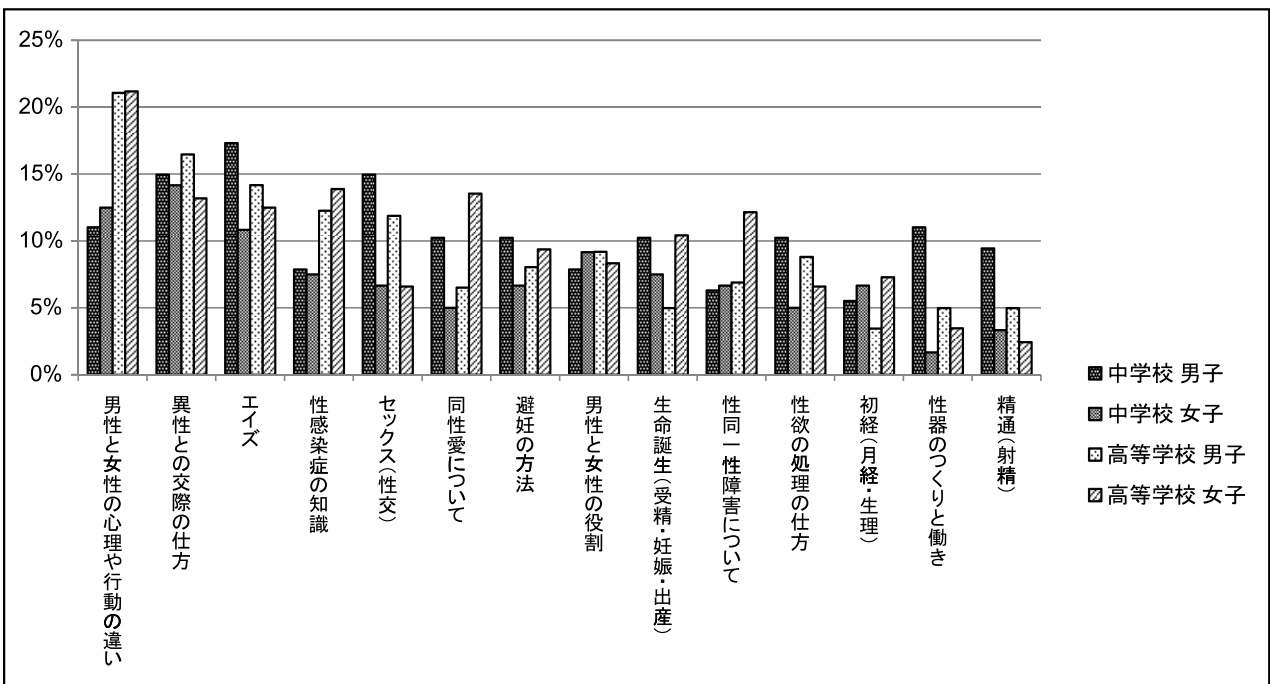


図1 性について知りたい内容 (2010年)
(中学生 264名, 高校生 582名)

交際の仕方」15.4%、「セックス（性交）」15.0%、と続いた。中学生女子では「異性との交際の仕方」の14.2%が最も高率となり、次に「男女の心理や行動の違い」12.5%、「エイズ」10.8%と続いた。

高校生男子では「男女の心理や行動の違い」の21.1%が最も高率となった。次に「異性との交際の仕方」15.4%、「エイズ」14.2%、と続いた。高校生女子では「男女の心理や行動の違い」の21.1%が最も高率となり、次に「性感染症の知識」13.9%、「同性愛について」13.5%と続いた。この結果は、財団法人日本性教育協会³⁶⁾が報告した結果とほぼ同様の傾向を示している。

(2) 自己認識欲求について

自己認識欲求では、中学生・高校生ともに女子の方が男子よりも高得点群の比率が高い結果となった。つまり、女子の方が男子よりも自己認識欲求が強い傾向にあり、自分に関する情報を積極的に取り入れようとすることを示している。

(3) むくもり希求について

中学生男子33.6%、中学生女子57.9%、高校生男子48.1%、高校生女子71.2%が高得点群となった。中学生・高校生ともに男子より女子の方が人のむくもりを求める気持ち強い傾向であることが示された。また、高校生男子では学年が上がるごとにこの傾向が強くなる。

(4) 非行規範意識について

問題行動念慮では、学年が上がるごとに各念慮も高率となった。特に女子では、家出念慮と自殺念慮において男子よりも高い傾向がみられた。非行規範では、学年が上がるごとに非行行動に対する規範意識が低率となった。援助交際を「悪い」としたのは、中学生74.6%、高校生63.5%であった。

3) 行動的要因

(1) 交際の実態について

交際経験の有無では、中学生男子25.9%、中学生女子27.6%、高校生男子52.0%、高校生女子64.8%が特定の人と交際した経験があった（図2）。学年が上がるにつれて交際経験率が高率となり、特に、男子は中学3年生、

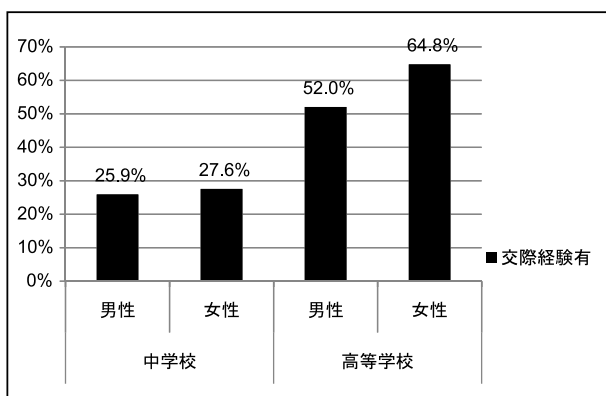


図2 交際経験率（2010年）
（中学生264名、高校生582名）

女子は中学2年生で交際経験率が急激に増加している。

初めて付き合ったときの自分の年齢は、男子平均13.5±2.2歳、女子平均13.6±2.2歳、始めて付き合ったときの相手の年齢は、男子平均14.2±5.0歳、女子平均14.1±2.9歳であった。

恋愛行動得点からみると、中学生男子37.1%、中学生女子31.4%、高校生男子60.6%、高校生女子68.4%が高得点群となった。中学生は交際をしている自覚があっても、具体的な恋愛の行動としては会話や登下校を一緒にする等の行動にとどまり、交際相手との間でキス（男子31.4%、女子34.3%）や性交（男子17.1%、女子8.6%）に進展する比率は少ないことが明らかになった。一方、高校生では、中学生と比較するとすべての項目において高率となった。特に、交際相手とのキス経験率は男子60.6%、女子65.4%、性交経験率では、高校生男子27.0%、高校生女子40.6%となった（図3）。

交際のイニシアティブでは、「自分から」告白をする割合は、中学生男子45.7%と中学生女子14.7%、高校生男子39.0%、高校生女子21.2%であり、男子の方が高率であった。また、告白をするのが「自分から」「相手から」を合わせると約74%となり、中学生・高校生の異性交際は告白をすることにより異性との交際が始まることを示している。

交際に対する抵抗感では、「本人同士がよければかまわない」約96%、「少し抵抗がある」約3%、「絶対によくないと思う」約1%となった。大部分の中学生・高校生が、本人同士がよければ交際してもかまわないと考えていることが明らかになった。

(2) 性行動の実態について

ここでは、性風俗・性情報への接触の有無をたずねた。アダルトビデオ、アダルトサイト、性情報の多い雑誌やマンガの視聴で、中学生・高校生ともに男子の経験率が女子よりも高率となった。

性交に対する意識では、「結婚するまで性交すべきではない」中学生23.5%、高校生13.0%、「婚約者同士なら性交してもよい」中学生23.5%、高校生14.2%、「愛があれば性交してもよい」中学生47.4%、高校生61.8%、

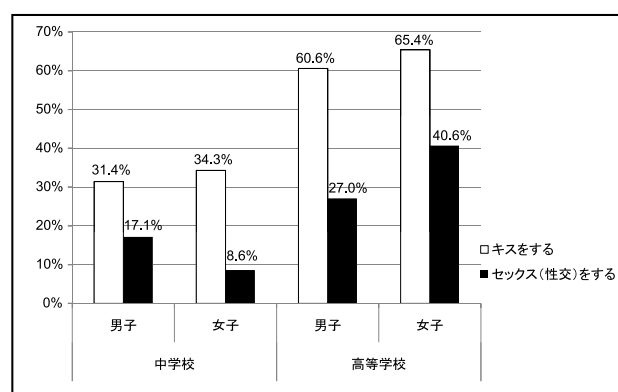


図3 キス及び性交経験率（2010年）
（中学生70名、高校生325名）

「愛がなくても性交してよい」中学生 5.6%，高校生 11.0%となった。

2. 中学生・高校生における各要因間の関連（2010年調査）

1) 交際との関連

(1) 環境的要因と交際経験の有無との関連

① 学校環境と交際経験の有無との関連

中学生は、授業理解の項目で「理解できないことが多い」「ほとんど理解できない」と答えた者では、交際経験有の者の割合が多く、有意差が見られた ($p < 0.05$)。

② 友人環境と交際経験の有無との関連

高校生は、「学校でよく話をする同性の友人がいる」「なんでもうちあけて話せる同性の友人がいる」と答えた者では、交際経験有の者の割合が多く有意差が見られた ($p < 0.001$)。

中学生・高校生ともに、「学校でよく話をする異性の友人がいる」「なんでもうちあけて話せる異性の友人がいる」と答えた者ほど交際経験率が高く、有意な関連がみられた (中学生 $p < 0.001$, 高校生 $p < 0.001$)。

友人自己開示では、高校生で、友人に対して自己開示する者の方が、交際経験有の者の割合が有意に高かった ($p < 0.001$)。

③ 家庭環境と交際経験の有無との関連

家庭における性の話題では、親と性に関する話をしたことのある者で、交際経験有の者の割合が多く、親と性に関する話をしたことのない者より高率となり、有意な関連がみられた (中学生 $p < 0.05$, 高校生 $p < 0.001$)。

父、母、両親に対する愛情と交際経験の有無に有意な関連はみられなかった。

④ 情報環境と交際経験の有無との関連

交際経験有の者で、携帯電話・PHSの所有率が高いことから、携帯電話・PHSは通信機器として交際に影響を及ぼす一要因となることが示唆される (中学生 $p < 0.001$, 高校生 $p < 0.05$)。

また、高校生においては、家電話(子機を含む) ($p < 0.01$)、テレビ ($p < 0.05$)、DVD・ビデオ ($p < 0.05$)、自分の部屋 ($p < 0.05$)を自分専用所有している者ほど交際経験有の者の割合が高く、有意な関連がみられた。

(2) 心理的要因と交際経験の有無との関連

① 自己認識欲求と交際経験の有無との関連

自己認識欲求と交際経験に有意な関連性は認められなかった。

② ぬくもり希求と交際経験の有無との関連

高校生において、交際経験有の者の方が交際経験無の者よりぬくもり希求得点が有意に高かったことから、交際経験有群の方が人のぬくもりを求める気持ちが強いことを示している ($p < 0.001$)。

③ 非行規範意識と交際経験の有無との関連

問題行動念慮では、中学生・高校生ともに、家出・退学・自殺・対人暴力・薬物使用の各問題行動をしたと思ったことがある者の方が、各問題行動をしたと思ったことがない者より、交際経験有の者の割合が有意に高かった (中学生 $p < 0.05$, 高校生 $p < 0.001$)。

非行規範では、中学生・高校生ともに、交際経験無の者の方が交際経験有の者より各種の非行行為に対して悪いこととする規範意識が有意に高かった (中学生 $p < 0.05$, 高校生 $p < 0.05$)。

(3) 行動的要因と交際経験の有無との関連

① 性風俗・性情報への接触と交際経験の有無との関連

性風俗・性情報への接触では、中学生は「プロフを通して異性とメール」 ($p < 0.05$) 「アダルトビデオを見たこと」 ($p < 0.001$) 「インターネットのアダルトサイトを見たこと」 ($p < 0.001$) 「性情報の多い雑誌やマンガを見たこと」 ($p < 0.05$) 「ナンパする・される」 ($p < 0.05$) の項目で経験があると答えた者の方が、交際経験有の者の割合が有意に高かった。また、高校生では、「インターネット(出会い系サイトやチャットなど)を通して異性とメール」 ($p < 0.001$) 「プロフを通して異性とメール」 ($p < 0.001$) 「ナンパする・される」 ($p < 0.001$) の項目で経験があると答えた者の方が、交際経験有の者の割合が有意に高かった。

2) 恋愛行動との関連

(1) 環境的要因と恋愛行動経験との関連

① 学校環境と恋愛行動経験との関連

中学生・高校生ともに、授業理解と恋愛行動経験には有意な関連は認められなかった。

高校生は、「学校に相談できる先生がいる」と答えた者の方が、恋愛行動得点が高得点の者の割合が多く、有意差が見られた ($p < 0.05$)。

② 友人環境と恋愛行動経験との関連

中学生は、「なんでもうちあけて話せる同性の友人がいる」と答えた者の方が、恋愛行動得点高得点の者の割合が多く有意差が見られた ($p < 0.01$)。高校生は、「学校でよく話をする同性の友人がいる」「なんでもうちあけて話せる同性の友人がいる」「学校でよく話をする異性の友人がいる」「なんでもうちあけて話せる異性の友人がいる」と答えた者の方が、恋愛行動得点高得点の者の割合が多く有意差が見られた ($p < 0.05$)。

友人環境では、中学生で「友人非干渉」の高得点群の者の方が、恋愛行動得点高得点の者の割合が多く有意差が見られた ($p < 0.05$)。また、高校生では、「友人自己開示」の高得点の者の方が、恋愛行動得点高得点群の者の割合が多く有意差が見られた ($p < 0.001$)。

③ 家庭環境と恋愛行動経験との関連

家庭環境では、高校生で、「母に対する感じ方」の高得点の者の方が、恋愛行動高得点の者の割合が高く、母を尊敬し、母から愛されているという意識が高かつ

表2 中学生（2010年）における交際経験の有無と各要因の関連（ロジスティック回帰分析の結果）

独立変数	ロジスティック回帰係数	Wald	有意確率	オッズ比	オッズ比の95.0%信頼区間	
					下限	上限
学校でよく話をする異性の友人	2.72	10.03	p<0.01	15.22	2.82	82.08
携帯電話・PHS	-2.28	8.24	p<0.01	0.10	0.02	0.48
恋愛や悩みの相談相手（同性の先輩）	-4.28	12.90	p<0.001	0.01	0.00	0.14
インターネットのアダルトサイトを見たこと	-2.05	4.23	p<0.05	0.13	0.02	0.91
父親に対する感じ方得点	3.14	9.71	p<0.01	23.17	3.21	167.27
母親に対する感じ方得点	-4.53	13.34	p<0.001	0.01	0.00	0.12
ぬくもり希求得点	1.93	4.95	p<0.05	6.89	1.26	37.73
非行規範高低	1.89	3.84	p<0.05	6.60	1.00	43.67

注) 交際経験有 (0) 交際経験無 (1)

た (p<0.05)。

家庭における性の話題では、高校生では、親と性に関する話をしたことがある者の方が親と性に関する話をしたことの無い者より恋愛行動高得点の者の割合が高く、有意な関連がみられた (p<0.001)。

④ 情報環境と恋愛行動経験との関連

中学生においては、「テレビ」を自分専用に所有している者ほど恋愛行動高得点の者の割合が高く、有意な関連がみられた (p<0.05)。また、高校生においては、「DVD・ビデオ」を所有している者ほど恋愛行動高得点の者の割合が高く、有意な関連がみられた (p<0.05)。

(2) 心理的要因と恋愛行動経験との関連

① 自己認識欲求と恋愛行動経験との関連

自己認識欲求と恋愛行動経験には有意な関連性はなかった。

② ぬくもり希求と恋愛行動経験との関連

高校生は、ぬくもり希求高得点の者の方が、恋愛行動高得点が高得点の者の割合が多く、有意差が見られた (p<0.001)。

③ 非行規範意識と恋愛行動経験との関連

問題行動念慮と恋愛行動経験には有意な関連性はなかった。

非行規範と恋愛行動経験には有意な関連性はなかった。

3. 中学生・高校生の交際と恋愛行動に影響を及ぼす要因分析（2010年及び2002年調査）

今回、交際及び恋愛行動に影響を及ぼす要因の検討にはロジスティック回帰分析を用いた。分析の結果から、影響要因となっている項目及び、その影響の強さを明らかにすることができたため分析方法として妥当であると判断し、使用した。

分析にあたっては、「授業理解度」「相談できる先生の有無」「学校でよく話をする同性・異性の友人の有無」

「なんでもうちあけて話せる同性・異性の友人の有無」「父・母との同居の有無」「自分専用の所有物の有無」「親と性に関する話をしたことの有無」「恋愛や性に関する悩みの相談相手の有無」「性情報及び性風俗への接触の有無」「友人同調・友人非干渉・友人自己開示得点」「父・母・両親に対する感じ方得点」「自己認識欲求得点」「ぬくもり希求得点」「問題行動念慮得点」「非行規範得点」を独立変数とし、「交際経験の有無」「恋愛行動得点」に従属変数として分析を行った。発達段階を踏まえ、中学生と高校生はそれぞれ個別に分析を行った。

1) 中学生（2010年調査）の交際に影響を及ぼす要因

ロジスティック回帰分析の結果は、表2のとおりである。中学生の交際に影響を及ぼす要因について有意な関連が得られたのは、「学校でよく話をする異性の友人がいる」「携帯電話・PHSを所有している」「恋愛や性の相談を異性の先輩にする」「インターネットのアダルトサイトを見たこと」「父に対する感じ方得点」「母に対する感じ方得点」「ぬくもり希求得点」「非行規範得点」であった。

中学生の交際に最も強く影響を与えている要因は、「母に対する感じ方得点」で、次に「恋愛や性の相談を同性の先輩にする」であった。

2) 中学生（2010年調査）の恋愛行動に影響を及ぼす要因

ロジスティック回帰分析の結果、独立変数の項目が多かったことから完全回答が少なく、中学生の恋愛行動に影響を及ぼす要因についての分析結果が得られなかった。

3) 高校生（2010年調査）の交際に影響を及ぼす要因

ロジスティック回帰分析の結果は、表3のとおりである。高校生の交際に影響を及ぼす要因について有意な関連が得られたのは、「学校でよく話をする同性の友人がいる」「なんでもうちあけて話せる同性の友人がいる」、

表3 高校生（2010年）における交際経験の有無と各要因の関連（ロジスティック回帰分析の結果）

独立変数	ロジスティック回帰係数	Wald	有意確率	オッズ比	オッズ比の95.0%信頼区間	
					下限	上限
学校でよく話をする同性の友人	1.58	5.27	p<0.05	4.85	1.26	18.70
なんでもうちあけて話せる同性の友人	0.83	6.85	p<0.01	2.30	1.23	4.28
学校でよく話をする異性の友人	0.94	11.64	p<0.001	2.55	1.49	4.36
なんでもうちあけて話せる異性の友人	0.71	5.26	p<0.05	2.02	1.11	3.70
自分専用の家電話	-1.36	4.50	p<0.05	0.26	0.07	0.90
恋愛や悩みの相談相手（異性の友人）	-1.22	11.13	p<0.001	0.29	0.14	0.60
プロフを通して異性とメール	-1.16	11.98	p<0.001	0.31	0.16	0.60
インターネットのアダルトサイトを見たこと	-0.71	4.24	p<0.05	0.49	0.25	0.97
性情報の多い雑誌やマンガを見たこと	0.98	8.75	p<0.01	2.67	1.39	5.12
ナンパする・される	-0.98	7.41	p<0.01	0.38	0.19	0.76
問題行動念慮得点	-0.66	6.15	p<0.05	0.52	0.31	0.87

注) 交際経験有 (0) 交際経験無 (1)

表4 高校生（2010年）における恋愛行動得点と各要因の関連（ロジスティック回帰分析の結果）

独立変数	ロジスティック回帰係数	Wald	有意確率	オッズ比	オッズ比の95.0%信頼区間	
					下限	上限
学校でよく話をする同性の友人	-3.23	5.98	p<0.05	0.04	0.003	0.53
恋愛や悩みの相談相手（同性の先輩）	1.28	4.41	p<0.05	3.60	1.09	11.91
性情報の多い雑誌やマンガを見たこと	1.71	19.09	p<0.001	5.52	2.57	11.88
ナンパする・される	0.79	4.99	p<0.05	2.21	1.10	4.44
友人自己開示得点	0.91	5.83	p<0.05	2.48	1.19	5.20
ぬくもり希求得点	0.96	8.13	p<0.01	2.60	1.35	5.02

注) 低得点群 (0) 高得点群 (1)

「学校でよく話をする異性の友人がいる」「なんでもうちあけて話せる異性の友人がいる」「自分専用の家電話（子機を含む）を所有している」「恋愛や性の相談を異性の友人にする」「プロフを通して異性とメールをしたこと」「インターネットのアダルトサイトを見たこと」「性情報の多い雑誌やマンガを見たこと」「ナンパする・される」「問題行動念慮得点」であった。

高校生の交際に最も強く影響を与えている要因は、「学校でよく話をする同性の友人がいる」で、次に「自分専用の家電話」「恋愛や性の相談を異性の友人にする」「プロフを通して異性とメール」と続いた。

4) 高校生（2010年調査）の恋愛行動に影響を及ぼす要因

ロジスティック回帰分析の結果は、表4のとおりである。高校生の恋愛行動に影響を及ぼす要因について有意

な関連が得られたのは、「学校でよく話をする同性の友人がいる」「恋愛や性の相談を同性の先輩にする」「性情報の多い雑誌やマンガを見たこと」「ナンパする・される」「友人自己開示得点」「ぬくもり希求得点」であった。

高校生の恋愛行動に最も強く影響を与えている要因は、「学校でよく話をする同性の友人がいる」で、次に「性情報の多い雑誌やマンガを見たこと」と続いた。高校生の交際及び恋愛行動に影響を及ぼしている共通の要因として「性情報の多い雑誌やマンガを見たこと」があげられた。

5) 中学生（2002年調査）の交際に影響を及ぼす要因

ロジスティック回帰分析の結果は、表5のとおりである。中学生の交際に影響を及ぼす要因について有意な関連が得られたのは、「携帯電話・PHSを所有している」「ぬくもり希求得点」「問題行動念慮得点」であった。

表5 中学生（2002年）における交際経験の有無と各要因の関連（ロジスティック回帰分析の結果）

独立変数	ロジスティック回帰係数	Wald	有意確率	オッズ比	オッズ比の95.0%信頼区間	
					下限	上限
携帯電話・PHS	0.77	5.09	p<0.05	2.16	1.11	4.21
ぬくもり希求得点	0.89	6.67	p<0.05	2.43	1.24	4.76
問題行動念慮得点	0.98	8.31	p<0.01	2.67	1.37	5.21

注) 交際経験有 (0) 交際経験無 (1)

6) 中学生（2002年調査）の恋愛行動に影響を及ぼす要因

ロジスティック回帰分析の結果、独立変数の項目が多かったことから完全回答が少なく、中学生の恋愛行動に影響を及ぼす要因についての分析結果が得られなかった。

4. 中学生における各要因の経年変化について（2002年及び2010年調査）

1) 環境的要因

(1) 学校環境について

授業理解では、「ほとんど理解できる」「まあまあ理解できる」は、2002年は92.1%、2010年は87.5%となり、2002年の方が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。相談できる先生の有無では、「いる」と応えた生徒が2002年では34.6%、2010年では39.5%あり、教師生徒間の関係に有意差は見られなかった。

(2) 友人環境について

友人では、2002年は95.2%、2010年は98.1%が同性の友人を有している。また、2002年は75.3%、2010年は82.5%がなんでも話せる同性の友人を有しており、2010年の方が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。

しかし、友人自己開示では、2002年は66.4%、2010年は57.4%が高得点群となり、2002年の方が異性のことや自分の悩み、将来のことについて友人に話す自己開示傾向が強い結果となった（ $p<0.05$ ）。

(3) 家庭環境について

父・母・両親への愛情は、2002年より2010年の方が男女ともに高くなる傾向がみられたものの、有意差はなかった。

「親と性に関する内容の話をしたことがあるか」は、2002年は男子13.4%、女子53.2%、2010年は男子13.4%、女子47.7%が、あると回答しており、経年変化は見られなかった。

(4) 情報環境について

携帯電話・PHS 所有は、2002年は27.9%、2010年は48.3%となり、有意に増加していた（ $p<0.001$ ）。これは、近年の携帯電話・PHSの急速な普及によるものと考えられる。

2) 心理的環境

(1) 性に対する興味・関心について

性について知りたい内容は、2002年は、男子では「異性との交際の仕方」「セックス（性交）」が最も高率となり、次に「性欲の処理の仕方」と続いた。女子では「異性との交際の仕方」が最も高率となり、「男女の心理や行動の違い」「性同一性障害」と続いた。2010年は、男子では「エイズ」が最も高率となり、次に「異性との交際の仕方」「セックス（性交）」と続いた。中学生女子では「異性との交際の仕方」が最も高率となり、次に「男女の心理や行動の違い」「エイズ」と続いた。

(2) 自己認識欲求について

自己認識欲求では、経年変化に有意差はなかった。

(3) ぬくもり希求について

ぬくもり希求では、経年変化に有意差はなかった。

(4) 非行規範意識について

問題行動念慮では、経年変化に有意差はなかった。

3) 行動的要因

(1) 交際の実態について

交際経験の有無では、2002年では、男子17.6%、女子28.0%、2010年では、男子25.9%、女子27.6%が特定の人と交際した経験があったが、男女ともに有意差はなかった。

始めて付き合ったときの時の自分の年齢は、2002年は男子平均12.0±2.5歳、女子平均11.9±1.8歳、2010年は男子平均12.2±2.3歳、女子平均12.4±2.0歳であった。また、始めて付き合ったときの時の相手の年齢は、2002年は男子平均12.0±2.5歳、女子平均12.3±2.4歳、2010年は男子平均15.5±10.2歳、女子平均12.6±2.0歳であった。

恋愛行動経験では、「相手に相談事をする」「用もないのに電話やメールをする」といった好意的会話期待点は、2002年は男子37.5%、女子54.1%で、2010年は男子51.4%、女子60.0%で、男女ともに増加していたが、有意差は見られなかった。また、「二人だけでデートをする」「キスをする」「セックス（性交）をする」といった親密期待点は、2002年は男子16.7%、女子24.3%で、2010年は男子37.1%、女子31.4%となり、好意的会話期待点同様に増加していたが、有意差は見られなかった。

交際のイニシアティブでは、「自分から」告白をする割合は、2002年は男子 25.0%、女子 27.8%で、2010年は男子 45.7%、女子 14.7%と男子から告白をする割合が高くなった。

交際に対する抵抗感では、経年変化に有意差はなかった。

(2) 性行動の実態について

性交に対する意識では、経年変化に有意差はなかった。

IV. 考 察

本研究は、埼玉県の公立学校に通う中学生・高校生を対象として、中学生・高校生の交際及び恋愛行動に影響を及ぼす背景要因について分析を試みたものである。分析の視点として、中学生・高校生を取り巻く学校・友人・家庭環境や現代青年に特有の心理を設定した。これは、中学生・高校生の交際及び恋愛行動をできるだけ多くの要因から総合的にとらえたいと考えたからである。そこで、各要因がどのように中学生・高校生の交際及び恋愛行動に影響を与えていたか、調査結果を踏まえ次のように考察する。

1. 中学生・高校生における各要因の実態 (2010年調査)

中学生・高校生は、学校に相談できる先生が「いる」と答えた生徒が、中学生では 39.5%、高校生では 32.8%であり、教師生徒間の関係の希薄さがうかがえる結果となった。その反面、約 80%の生徒に何でも話せる友人がおり、相談ごとや性に関する話し相手として友人を選ぶ可能性が高いことを示唆している。

父・母・親への愛情では、中学校の1年生と2・3年生の間に開きがみられた。このことから、対象集団の心理的離乳期が1年生と2年生の間にあることが考えられる。思春期の青年は、自我の目覚めが生じ、自分自身に関心を持つと同時に、それまで親を通して得てきたものの見方に疑問を持ちはじめ、心身ともに親から独立しようとし始める。この現象は、親子関係からみた思春期における青年の心理的特長としてあげられる³⁷⁾。本調査でも、特に中学校1年生で父・母・親への愛情が高かったのは、この特長を反映しているものと考えられる。

性について知りたい内容では、中学生・高校生に共通して「異性との交際の仕方」及び「男女の心理や行動の違い」の項目があがった。これは、個人差はあるものの男女ともに自分自身が特定の人との交際や恋愛行動の主体的立場となることから、交際相手をより理解したいという気持ちの現われであることが考えられる。他の共通項目として「エイズ」「性感染症の知識」、中学生男子では「セックス(性交)」があがっていた。このことは、後述の性情報への接触が男子に多いという点とも共通している。また、高校生女子では、「同性愛について」知りたいと回答している割合が多かったが、これは近年メディア等に登場しているセクシャル・マイノリティの芸

能人による影響が考えられる。

中学生の恋愛行動は、友愛的な会話やプレゼントの交換、用も無いのに電話やメールをするといった段階から進展していることが特徴づけられた。また、恋愛行動得点からみると、中学生は異性と交際をしている自覚があっても、具体的な恋愛行動としては会話や登下校を一緒にする等の行動にとどまり、キスや性交に進展する比率は少ないことが明らかになった。一方、高校生では、中学生と比較するとすべての項目において高率となった。特に、交際相手との性交経験率では、高校生男子 27.0%、高校生女子 40.6%となり、高校生になると活動範囲及び交友関係の広がりとともに、性行動も活発化することが窺える。

交際のイニシアティブでは、「自分から」告白をする割合は、中学生男子 45.7%と中学生女子 14.7%、高校生男子 39.0%、高校生女子 21.2%であり、中学生・高校生ともに、男子の方が高率であった。近年、女子の性経験率が伸びているとはいえ、交際や恋愛行動のイニシアティブは男子がとることが多く、男性が能動的、女性が受動的といった伝統的パターンが依然として存在していると考えられる。

2. 中学生・高校生における各要因間の関連 (2010年調査)

1) 交際との関連

交際と他要因との関連性において、中学生・高校生ともに、「学校でよく話をする異性の友人がいる」「なんでもうちあけて話せる異性の友人がいる」と答えた者ほど交際経験率が高く、有意な関連がみられた(中学生 $p < 0.001$, 高校生 $p < 0.001$)。茂木³⁸⁾は、大学生を対象とした調査で、性交経験の有無について、どのような性教育を受けたかというよりも、他者とどのようなコミュニケーションをしているか・どのようなコミュニケーション能力を持っているかということの方が影響が強いことを示唆している。このことから、中学生・高校生は、会話やメールなど様々なコミュニケーション手段で友人となることができる能力を持っている者ほど、活動範囲が広がり、そのことが交際にも影響しているものと思われる。

また、東京都生活文化局の報告³⁾によると、問題行動と性経験は強い関連があるとしている。本研究でも、問題行動念慮と交際経験の有無は有意な関連を示していた。各念慮は、必ずしも直接問題行動に結びつかない面もあるが、生活状況やストレス等がきっかけとなって問題行動に移行する可能性は考えられる。

2) 恋愛行動との関連

恋愛行動と他要因との関連性において、恋愛行動得点の高い者は、中学生では「テレビを所有している」とこと、また、高校生では、「DVD・ビデオを所有している」とこと有意な関連があった。財団法人日本性教育協会の

調査では、個人用の情報機器を持つことによって、青少年が家族、とりわけ親の監視を離れて、様々な性情報に接触することになるとしている³⁹⁾。家族と同居する中で自分専用のテレビやDVD・ビデオを持っていることについては、深夜まで自由にテレビやDVD・ビデオを使用することができる生活環境や経済的な理由も考慮しなければならない。

また、高校生では、親と性に関する話をしたことのあつた者の方が恋愛行動高得点の者の割合が高く、有意な関連がみられた ($p < 0.001$)。高校生は中学生と比較すると、交際に伴う具体的な恋愛行動も多くなり、好意的会話期待点及び親密期得点が高くなることから、教師や親と交際の仕方や性に関する話題を多く持つようになることが推測される。これは、子から教師や親に対して質問している場合と、教師や親が子の交際の状況を案じて話題を提供している場合の両者が考えられる。

3. 中学生・高校生の交際と恋愛行動に影響を及ぼす要因分析

1) 中学生の交際に影響を及ぼす要因

ロジスティック回帰分析の結果から、2002年では、交際に影響を及ぼす要因として「携帯電話・PHS」「ぬくもり希求」「問題行動念慮」があげられたが、8年後の2010年には、「母に対する感じ方」「恋愛や性の相談を同性の先輩にする」へと変化していた。「携帯電話・PHS」に関しては、その所有率が増加したため、単に所有しているということではなく、その使用内容や使用方法に踏み込んだ検討をする必要が出てきた。また、「ぬくもり希求」「問題行動念慮」といった心理的な要因から母親や同性の先輩との関係へと要因が変化していることから、身近な人との人間関係が中学生の交際に影響を与えていることが窺える。

2) 高校生の交際に影響を及ぼす要因

ロジスティック回帰分析の結果から、交際に影響を及ぼす要因として、「学校でよく話をする同性の友人がいる」「自分専用の家電話」「恋愛や性の相談を異性の友人にする」「プロフを通して異性とメール」があげられた。

茂木⁴⁰⁾は、大学生を対象とした調査で、性交経験にもっとも影響を与えているのは、男女とも「携帯電話のメールの送信数」であるとしており、セックス（性交）についてどこで知ったかでは、男女ともに最も多いのは「友人や先輩」であることを明らかにしている。このことから、高校生の発達段階における同性・異性の友人は、交際のことや自分の悩み、将来のことについて話したり、性情報の交換を行う重要な他者であることがわかった。

また、彼らが学んできた家庭及び学校における性教育の内容が、生理学的あるいは道徳的な内容は多い反面、中学生・高校生の多くが知りたいと感じている交際や恋愛行動に直接結びつく心理的内容が乏しいことが考えられる。そのため、同性・異性の友人とのコミュニケーション

ンを通して情報を入手せざるを得ない現状が推測できる。特に、男子においては、2010年調査の結果からも実際のイニシアティブを持っている者の割合が多く、中学生男子では2002年からの8年間で性行動が活発化していることが明らかとなった。このことから、パートナーとの間で主体的な性行動を望まれる男子にとって、同性・異性の友人とのコミュニケーションは、重要な役割を果たしていることを示している。

3) 高校生の恋愛行動に影響を及ぼす要因

ロジスティック回帰分析の結果から、恋愛行動に影響を及ぼす要因として、「学校でよく話をする同性の友人がいる」について「性情報の多い雑誌やマンガを見たこと」があげられた。高校生は性情報の多い雑誌やマンガを媒介として様々な性情報を取り入れており、それが恋愛行動に影響を及ぼしていると考えられる。東京都生活文化局の報告では、性情報の「信用度」や「肯定度」が性行動を促進するとしている。中学生・高校生が、メディアから受ける情報をどう評価するかが、その後の行動や情報の受け取り方に大きく影響する可能性がある。

4. 中学生における各要因の経年変化（2002年及び2010年調査）

携帯電話・PHS所有は、2002年は27.9%、2010年は48.3%となり、有意に増加していた ($p < 0.001$)。携帯電話所有の早期化により、携帯メールを通じて友人や交際相手との親密さの速度を速めていることが推測できる。

恋愛行動経験では、「相手に相談事をする」「用もないのに電話やメールをする」といった好意的会話期待点は、2002年は男子37.5%、女子54.1%で、2010年は男子51.4%、女子60.0%で、女子よりも男子が増加傾向を示していた。また、「二人だけでデートをする」「キスをする」「セックス（性交）をする」といった親密期得点においても、2002年は男子16.7%、女子24.3%で、2010年は男子37.1%、女子31.4%となり、好意的会話期待点同様に女子よりも男子が増加傾向を示していた。また、交際のイニシアティブにおいても、「自分から」告白をする割合は、2002年は男子25.0%、女子27.8%で、2010年は男子45.7%、女子14.7%と男子から告白をする割合が高くなった。このことから、本地域では8年間の間に、男子において性行動が活発化していることがわかった。これらを踏まえ、今後は交際及び恋愛行動における性役割獲得の過程についても検討を行う必要が出てきた。

V. 得られた知見と今後の性教育への提言

本研究から得られた新しい知見として、以下の2点を挙げる。第一に、当地域の中学生は、異性と交際をしている自覚があつても、具体的な恋愛行動としては会話や登下校を一緒にする等の行動にとどまり、交際相手との間でキス（男子31.4%、女子34.3%）や性交（男子17.1%、女子8.6%）に進展する比率は少ないことが明らかになつ

た。一方、高校生では、交際相手とのキス経験率が男子60.6%、女子65.4%、性交経験率が男子27.0%、女子40.6%となり、中学生から高校生への発達段階において性行動が活発化していることが示された。2005年の財団法人日本性教育協会「青少年の性行動全国調査」⁴¹⁾の結果では、キス経験率が男子48.4%、女子52.0%、性交経験率が男子26.6%、女子30.0%である。質問の方法が異なるため、単純比較することはできないけれど、性経験における男女の比率から、財団法人日本性教育協会「青少年の性行動全国調査」の結果同様、当地域でも高校生女子の性行動が一段と活発化していることが注目される。本研究との調査年度に5年の間隔があることを踏まえると、今後、1990年代に男子より女子の性行動が活発化した時期(女子の乗り越え現象)と同様の現象が加速する可能性を示すデータとなり、新たな発見となった。

第二に、2002年及び2010年の中学生に対する調査における8年間の経年変化では、交際経験率が2002年は男子17.6%、女子28.0%であったのに対し、2010年には男子25.9%、女子27.6%となり、男子の性行動が活発化していることが明らかとなった。また、交際開始時に「自分から」告白をする割合は、2002年は男子25.0%、女子27.8%であったのに対し、2010年には男子45.7%、女子14.7%と、8年間で男子から告白をする割合が高くなった。財団法人日本性教育協会「青少年の性行動全国調査」⁴²⁾の調査では、1993年から2005年まで、中学生男子がデート経験においてイニシアティブをとる(デートに誘うのは「主に自分」という構図はほとんど変わっていないことを示している。当地域では、2002年に女子が交際開始時のイニシアティブをとる割合が多かった逆転の現象から8年間で全国調査の結果に近づいており、恋愛行動においても男性が能動的、女性が受動的といった伝統的な性役割を求める性情報や社会規範の影響が当地域の中学生男子にも及んでいるということが推測される結果となった。これは、中学生の恋愛行動に関する研究が、未だ少数という中で見出された注目すべき点である。

中央教育審議会初等中等教育分科会「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会(2005.7.27)」では、性教育として求められる内容について、「学校における性教育については、子どもたちは社会的責任を十分には取れない存在であり、また、性感染症を防ぐという観点からも、子どもたちの性行為については適切ではないという基本的スタンスに立って、指導内容を検討していくべきであるということでおおむねの意見の一致を見た」と述べている。

これまで、子どもたちの交際や恋愛行動は、社会規範やモラルといったいわゆる常識としてとらえられることが多かったことや、現代社会の多様な価値観及び規範意識の希薄化、性教育バッシングなどから、筆者自身も学校における性教育で交際や恋愛行動を教材として扱づらい状況があると感じている。

しかし、現在も青少年の性行動は、低年齢化が進行しているといわれている⁴³⁾。10代の性交初体験年齢が16~17歳で最も高率である⁴⁴⁾ことや、恋愛行動が中学生から高校生へと段階的に進行することから勘案すると、中学生で交際経験のある者は高校生になるとさらに多くの恋愛行動を経験し、性交を体験することも予想される。このことから、中学校・高等学校では、引き続き人間関係における自己決定能力の育成や性感染症及び望まない妊娠の予防方法等について、より具体的な性の学習を行う必要があると考えられる。

今後の課題として、中学生・高校生はインターネットや携帯電話、雑誌、マンガ等を媒介として様々な性情報を取り入れており、それが交際や恋愛行動に影響を及ぼしていることから、メディアを活用しつつも、批判的に情報に接する態度を養うことが必要である。

また、中学生・高校生の交際は友人との関係に深い関わりが認められた。しかし、中学生・高校生の間で性の問題が起きた時に、友人同士では解決できない問題も多いはずである。中学生・高校生が無料で相談ができる公的な思春期クリニックやウェブサイトの設立、ピアカウンセラーの養成も急がれる課題である。

VI. 研究の限界と今後の研究課題

本研究の限界は、埼玉県西部地域の中学生・高校生を対象とした調査であるため、全国的な調査ではないという点、質問紙調査の実施を学校の教室で行ったことから、社会的に望ましい回答をする生徒がいる可能性を否定できない点、交際相手で行った恋愛行動に限局した調査であったため、交際を行っていない生徒を分析対象としなかった点である。

今後の研究課題として、今回は中学生・高校生の交際と恋愛行動の背景要因について調査したが、時間とともに変化する環境要因に応じて行動様式も変化するため、定期的な調査や心理的要因の抽出などを的確に行う必要があることと、質問紙による量的調査だけで明らかにできない内容について、聞き取り等の質的調査で補う必要が出てきたことである。

さらに、今後は性的マイノリティである性同一性障害や同性愛の子どもたちの交際や恋愛行動にも注目して系統的な調査を行うとともに、性教育との関わりについて考えていきたい。

VII. 謝 辞

本研究の趣旨をご理解いただき、ご協力いただきました調査対象校の中学校及び高等学校の校長先生はじめ教職員、保護者、生徒の皆様はこの場をお借りして、心よりお礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 文部省：学校における性教育の進め方考え方。文部省、p.13(1999)

- 2) 財団法人日本性教育協会：「若者の性」白書. 小学館, p.8 (2007)
- 3) 東京都生活文化局：大都市高校生の性をめぐる意識と行動. 東京都生活文化局, p.149 (1984)
- 4) 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会；児童・生徒の性. 学校図書, p.13 (2002)
- 5) 堀 洋道, 松井 豊：高校生の性行動が問いかけるもの. 高校教育展望, 7(9), p.140～150 (1982)
- 6) 久保田美雪, 渡邊典子, 小柳恭子：高校生のライフスタイル, 性意識および性に関する対処行動の調査. 新潟青陵大学紀要, 5, p.189～200 (2005)
- 7) 松井 豊：青年の恋愛行動の構造. 心理学評論, 33(3), p.355～370 (1990)
- 8) 木原雅子：10代の性教育と日本社会. ミネルヴァ書房, p.157 (2006)
- 9) 5) と同書. p.6 (2006)
- 10) NHK「日本人の性」プロジェクト編：NHK 日本人の性行動・性意識. NHK 出版, p.224 (2002)
- 11) ミルトン・ダイヤモンド, アーノ・カーレン：人間の性とは何か. 小学館, p.149～152 (1989)
- 12) 石濱淳美 編著：新版セクソロジー辞典. メディカ出版, p.258 (1994)
- 13) John Maney, Herman Musaph: 性科学大事典. NISHI-MURA, p.325 (1985)
- 14) 福富 護：性成熟の心理. 学校保健研究, 39(10), p.456～460 (1988)
- 15) 福富 護：思春期の性意識と性行動. 思春期学会, 13(2), p.148～153 (1995)
- 16) 佐藤孝道：高校生の性知識, 性役割観, 性行動に関する研究 (第一報). 思春期学会, 13(3), p.243～248 (1995)
- 17) 戸田弘二, 松井 豊：大学生の愛着行動と異性交際. 心理学研究, 56(5), p.288～291 (1985)
- 18) 竹村和久：異性選択過程の研究Ⅰ. 日本社会心理学会第28回大会発表論文集, 62(38), p.62 (1987)
- 19) 竹村和久：異性選択過程の研究Ⅱ. 日本社会心理学会第28回大会発表論文集, 62(39), p.38 (1987)
- 20) 岡田守弘, 大草正信, 高安睦美：中学生・高校生の異性交際と性的衝動との関係について－横浜地域での調査をもとにして－. 横浜国立大学教育紀要, 37, p.37～63 (1997)
- 21) 松井 豊, 木賊知美, 立澤晴美, 大久保宏美, 大前晴美, 岡村美樹, 米田佳美：青年の恋愛に関する測定尺度の構成. 東京都立立川短期大学紀要, 23, p.13～23 (1990)
- 22) 松井 豊, 井上果子, 宮武朗子, 鈴木信子：中学生の恋愛意識 (1). 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, p.465 (1995)
- 23) 松井 豊, 井上果子, 宮武朗子, 鈴木信子：中学生の恋愛意識 (2). 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, p.466 (1995)
- 24) 松井 豊, 井上果子, 宮武朗子, 鈴木信子：中学生の恋愛意識 (3). 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, p.466 (1995)
- 25) 7) と同書. p.355～370 (1990)
- 26) 8) と同書. p.6 (2006)
- 27) 福富 護：(助)女性のためのアジア平和基金報告書. (1998)
- 28) 27) と同書. (1998)
- 29) 27) と同書. (1998)
- 30) 27) と同書. (1998)
- 31) 上瀬由美子：自己認識欲求の構造と機能に関する研究. 心理学研究, 63(1), p.30～37 (1992)
- 32) 27) と同書. (1998)
- 33) 櫻庭隆浩, 松井 豊, 福富 護, 成田健一, 上瀬由美子, 宇井美代子, 菊島充子：女子高校生における「援助交際」の背景要因. 教育心理学研究, 49(2), p.167～174 (2001)
- 34) 宇井美代子, 福富 護：「援助交際」に対する女子高校生の意識. 東京学芸大学紀要 1 部門, 49, p.93～101 (1998)
- 35) 内山純子：性関連の福祉犯被害者の規範意識. 犯罪と非行, 92, p.26～52 (1992)
- 36) 2) と同書. p.213 (2007)
- 37) 加藤隆勝 編：思春期の人間関係. 大日本図書, p.33～40 (1997)
- 38) 茂木輝順：学校における性教育と青少年の性行動との関連. 女子栄養大学, p.94 (2009)
- 39) 2) と同書. p.41 (2007)
- 40) 38) と同書. p.94 (2009)
- 41) 2) と同書. p.200～202 (2007)
- 42) 2) と同書. p.36 (2007)
- 43) 2) と同書. p.26 (2007)
- 44) 10) と同書. p.224 (2002)

